

## 実践団体情報

記入日	西暦 2023 年 1 月 3 日 (2022 年度のチャレンジプラン)
実践団体名	2011team 釜石小ぼうさい
代表者名	代表 加藤孔子
プラン全体のタイトル	大津波を生き抜いた子どもたちのひみつが未来の命を救う 2011 team 釜石小の軌跡 『このたねとぼそ』
電話番号	019-621-6516 (R5.3 月まで)
メールアドレス	<a href="mailto:koukok@iwate-u.ac.jp">koukok@iwate-u.ac.jp</a> (R5.3 月まで) <a href="mailto:koko0102@ozzio.jp">koko0102@ozzio.jp</a> (R5.4~)
実践団体の説明	<p>「2011team 釜石小ぼうさい」は、東日本大震災前から釜石小学校の防災教育に取り組んだ教員有志と、大津波を生き抜いた子ども（現大人）有志で構成しています。</p> <p>これまで、岩手県内外の防災講演会やシンポジウム等に参加し、東日本大震災時の釜石小学校の防災教育の取組や大津波を生き抜いた子どもたちの経験談等を伝えてきました。</p> <p>東日本大震災から 11 年の月日を経て、当時の教職員は異動先の各地で釜石小学校の経験を活かし、防災・復興教育に取り組んできました。そしてあの時の子どもたちは今、当時のことを伝えられる素敵な大人に成長しました。</p> <p>東日本大震災の記憶の風化が進む昨今、釜石小学校の防災教育やあの時の子どもたちの行動や考え方、学校教育の在り方について伝承していくことが、未来の命を救うことにつながることを願いながら活動しています。</p>
所属メンバー	釜石小学校元校長：加藤孔子 釜石小学校元教員：大和田典明・及川美香子・室明美 釜石小学校地域コーディネーター：寺田恵美子 大津波を生き抜いた子どもたち：寺崎幸季・篠原優斗・内金崎愛海 他
活動地域	岩手県内外 所属メンバー各居住地～福岡県北九州市（オンライン）
活動開始時期・結成時期	2011 年から個人ごとに活動・チームの結成は 2020 年度

過去の活動履歴・受賞歴	<p>釜石小学校として2011年度「ぼうさい甲子園」小学校部門ぼうさい大賞受賞。</p> <p>メンバーそれぞれの伝承活動として、横浜市、神奈川県、千葉県、東京都、北九州市、秋田県、新潟県、千葉県柏市、福島県、高知県、和歌山県、大阪府高槻市、福岡県、岩手県内、岩手大学、岩手県内小中学校等々、要請に応じて、東日本大震災の伝承活動。</p> <p>2020年度、2021年度には北九州市防災・減災教育推進事業のリモートシンポジウムにおいて、シンポジスト、コーディネーターを務めた。</p>
プラン全体の概要	<p>2011年の東日本大震災発災時に、釜石小学校の子どもたちは下校後で学校管理下外にいたにもかかわらず、一人一人の判断で全員が大津波から自分の命を守り抜きました。</p> <p>何が子どもたちの命を救ったのでしょうか？</p> <p>東日本大震災から11年が経過し、記憶、伝承の風化が進んでいます。</p> <p>そこで、本プランでは、震災当時の釜石小学校、教職員、子どもたちの状況や手記、原点である釜石小学校の防災教育等を記した災害伝承本『このたねとぼそ』として発行、県内外に広く配布し、「防災教育のたね」を飛ばします。</p> <p>さらに、大津波を生き抜いた子どもたちが現在の小学生に自分が避難した経路や当時の様子を伝えながら歩くフィールドワーク、現在の小学生とパネルディスカッションを実施します。東日本大震災を経験したあの子どものたちは11年が経ち、地域を支える大人に成長しています。その彼らが現在の小学生や地域住民に東日本大震災を伝承し、新たな防災意識の向上、地域の防災文化の礎となることを目指しています。</p>

## プランの年間活動記録

①【伝承本『このたねとぼそ』】

②【伝承活動『フィールドワーク・パネルディスカッション』】

	プランの立案と調整	活動準備	実践活動
4月	活動プラン全体について 内容検討・修正	①伝承本製作準備作業	①執筆依頼・執筆活動
5月	活動プラン全体について 内容検討・修正	①伝承本製作準備作業 ②伝承活動準備作業	①執筆活動
6月	②教育委員会、学校との 打ち合わせ	①伝承本製作準備作業 ②伝承活動準備作業	①執筆活動
7月	②教育委員会、学校、警 察との打ち合わせ	①伝承本製作準備作業 ②伝承活動準備作業	①伝承本『このたねとぼそ』 完成
8月	②当日開催に関する打ち 合わせ内容調整	①配布先関係者へ配布、依頼 ②伝承活動開催作業	①完成本配布、配布依頼 ②フィールドワーク・パネル ディスカッション実施
9月		①読者アンケート集約 ②参加児童アンケート集約	①読者アンケート集約 ②参加児童感想集約
10月		①読者アンケート集約	①読者アンケート集約
11月	活動プラン全体総括	①②成果と課題	
12月	①②活動継続の検討	①②来年度以降の計画立案	
1月	①②活動継続の協力依頼	①②活動継続準備作業	①ネット公開②プロジェクト
2月	①②継続内容検討・修正	①②活動継続準備作業	次年度以降の事務局組織始動
3月	①②継続内容検討・修正	①②活動継続準備作業	次年度以降の事務局組織始動

プラン全体の反省点・課題・感想	①については、読者アンケートから、これからの学校教育、 防災教育に意義ある本となったことを確信した。 ②についても意義ある活動となった。さらに、伝承の発信や 継続をすることが必要だと考える。
今後の活動予定	・伝承本『このたねとぼそ』の増刷配布とネット公開。 ・「東日本大震災伝承フィールドワークバトンプロジェクト」として、大津波を生き抜いた子どもたちが伝承のバト ンを渡し、この活動を継続していく。

## 実践したプランの内容と成果

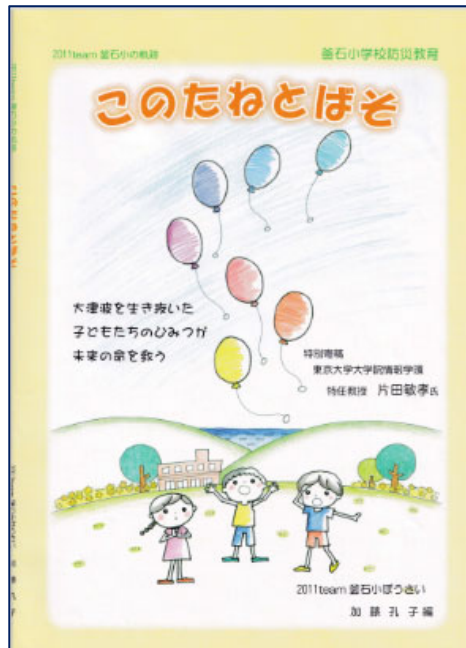
記入日	西暦 2023 年 1 月 3 日 (2022 年度のチャレンジプラン)
実践団体名	2011team 釜石小ぼうさい
実践番号	1
タイトル	東日本大震災伝承本『このたねとぼそ』の発刊 ～大津波を生き抜いた子どもたちの奇跡ではない釜石小の軌跡（釜石小の防災教育）～
実践担当者の名前	加藤孔子

実践にかかった金額	50 万円未満
実践の準備にかかった時間	数ヶ月
実践活動を実施した日時	西暦 2022 年 4 月～西暦 2022 年 12 月
実践の所要時間	3 時間×120 日 = 360 時間
実践の運営側で動いた人の人数	8 人
防災教育の対象者の属性	小学生（高学年）・大学生・教職員・保護者/PTA・地域住民・社会人/一般・高齢者・防災関係者・その他
防災教育の対象者の人数	約 150 人（『このたねとぼそ』を手にした人）
実践を行った都道府県と市区町村	岩手県内～東京都、群馬県、高知県、大阪府、福岡県
実践を行った具体的な場所	発信地：岩手県釜石市鶴住居 いのちをつなぐ未来館（『このたねとぼそ』を配布した場所）
★実践に必要なだった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	防災の専門家である大学教授 本の表紙絵イラストレーター・実際の浸水区域地図

達成目標	東日本大震災の記憶の風化が進む昨今、東日本大震災発災から学校再開までの学校教職員の動き、子どもたちが大津波を生き抜いた様子、震災以前からの釜石小学校の防災教育等を冊子としてまとめ、東日本大震災伝承と、子どもたちの命を守る学校の防災教育一助になるように、広く配布する。	
どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに

実践内容・方法

1 東日本大震災伝承本『このたねとぼそ』の執筆



11 年前の東日本大震災発災時の学校、子どもたちの状況、学校の教職員や子どもたちは何を考え、どう行動したか等を、震災時の職員の記録や大津波を生き抜いた子どもたちの手記等をまとめ、編集した。

また、震災から学校再開までと、再開からこの 11 年、岩手県内の学校は復興に向けてどのように取り組んできたか、地域とのかかわりや子どもたちの成長の様子等を

伝承し、釜石小学校の防災教育が未来へつなげられるように構成、執筆した。内容は以下のとおりである。

特別寄稿

釜石を未来につないだ防災教育

東京大学大学院情報学環 特任教授 片田敏孝氏

1 章 大津波を生き抜いた子ども達と釜石小学校の防災教育

2 章 大津波を生き抜いた子ども達が語る

あの日のこと そしてこの 10 年

3 章 子ども達の命を救ったもの

4 章 team 釜石小（当時の教員等）が語る

防災教育の取組の実際と地域との絆、学校再開

5 章 このたねとぼそ

2011Team 釜石小の『たね』は

6 章 このたねとぼそ 未来へのメッセージ

8 章 賛助寄稿

執筆者それぞれの経験をもとに執筆しており、偽りのないリアルな内容で東日本大震災を伝える貴重な資料となると確信する。

さらに、当時釜石市に防災教育を指導して下さった片田敏孝東京大学大学院特任教授が執筆して下さり、「姿勢の防災教育」など、防災

教育の原点でもある大切なことが書かれてあり、子どもたちの命を守る学校教員にぜひ読んでほしい一冊である。

この本は、実践番号2の活動参加者全員に配布した他、釜石市の津波伝承施設「いのちをつなぐ未来館」において希望する来館者に配布した。

また、岩手大学教育学部、教職大学院での講義のテキストに活用、岩手大学図書館、岩手県立図書館、国会図書館に寄贈、納本した。

## 2 『このたねとぼそ』の読者 Googleform アンケートの実施

『このたねとぼそ』には Googleform アンケートを添付した。アンケート結果から一部を紹介する。

【読者】…岩手県内外、遠くは九州、四国まで約150人に配布されている。職業は学校教育関係者が7割を占めているものの、小学生、大学生、大学院生、会社員、NPO法人団体、地域住民と多岐にわたっている。

【内容の理解】…防災教育の理解、東日本大震災の釜石小学校の状況、釜石小学校の防災教育についての理解は全て肯定的回答であった。

【『このたねとぼそ』の印象に残ったところ…自由記述から抜粋】

- ・津波の具体的な動き、心情を知って涙が止まらなかった。奇跡ではなく軌跡、まさにその通りだと感じた。

- ・釜石市の「いのちをつなぐ未来館」を訪れて、防災教育を改めて勉強しようと思っていたところに本書に出会いました。

- ・防災教育は、脅しではいけない、根本は命を大切にすること、防災教育を進めるあまり、地域を不安視するのではなく、地域に誇りをもてるようにすることなど、とても勉強になりました。

- ・釜石の出来事は、奇跡ではなく、裏付けされた教育がそこにあることが、わかる。子どもを中心に据えて、未来に向かって指導していく事の重要性を強く感じた。

- ・「姿勢の防災教育」の必要性とこれまで小生が行ってきた防災教育が「脅しの防災教育」になっていたと気づかせられ、今後の防災教育を考えるきっかけとなりました。

- ・防災教育を様々な手法で組み合わせて行っていたことも『釜石の奇跡』に繋がった背景の1つだと考えました。また、津波防災マップ作りや下

	<p>校時津波避難訓練の取組に子どもだけでなく保護者も巻き込んで行っていたことがさらに子ども達の安全意識を高めていったと感じました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・時系列に震災以前～未来まで、かかわるそれぞれの人の実際や思いがこの一冊に凝縮されています。学校、行政、地域、家庭、防災の専門職の方、どの立場においても相互のかかわりを経て学び、感じられるものは他にないと思います。</li> </ul> <p>【『このたねとぼそ』から学んだことの活用…自由記述から抜粋】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・『このたねとぼそ』は、防災教育～復興教育の起承転結・・・結ではない、未来への導となる一冊だと実感します。</li> <li>・「くるわけもない津波」に対して、本気で取り組んだ釜石小学校、本気を気持ちだけでなく児童にインパクトある授業として記憶に残し、実践につなげた教員、そして防災教育がたくさんの命を救い、郷土の可能性を見出した当時の児童たちが大人になった姿。釜石小学校からの学びが形となったこの一冊をより多くの人に知ってもらいたいと心から思っています。</li> <li>・学校教育のみならず、各自治体の避難訓練で生かしていきたいです。自治体の避難訓練への参加率が低いので、防災意識向上を図れたらと思います。</li> <li>・学校現場に勤務する者として、防災教育の重要性を改めて認識するとともに、今やるべきことは何かを考えて重点的に取り組んでいきたい。</li> <li>・学校と共にある地域！学校現場とは別に地域の中に広めていきたいと思えます。ひとりずつ、近くの方からひとりずつ確実に広めていきます。</li> </ul> <p>【『このたねとぼそ』に期待すること…自由記述から抜粋】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・県内にとどまらず、日本全国に防災教育が広まっていくことを期待しますし、この本がその役割を担うものと思っています。</li> <li>・これからのいわての復興教育の根幹となると実感しています。最低でも、岩手の教員が持つべき一冊だと思います。そのうえで、復興教育を展開することで、自校や自分の地域の特色をいかすことを考えれば、沿岸も内陸もなく（全国各地でも）展開できると思います。</li> <li>・震災当時の職員・子ども達やそこに関わる方々の考えや声をそのまま何うことができ、貴重な冊子であると感じる。とんでいったたねを、とんできたたねをしっかりと受け取り、生かしていくことが、これから続</li> </ul>
--	---

	<p>く人たちの命を救うことにつながると思う。多くのところにたねがとび、この考え方が広がっていくことを望みます。</p> <p>・種は、小鳥を介して、動物を介して遠くまで運ばれていきます。あるいは、自ら綿毛を使って遠くまで飛んでいきます。この冊子を通して遠くまで、遠くの人のところまで届き、不幸な出来事が起こらないように！防げるものは防いで欲しい！と願います。そのために、たくさんの方の手に渡りますように！（増刷を希望します。出来るなら、全ての教職員の手に渡りますように。）</p>	
得られた成果	『このたねとぼそ』は多くの方の手に届いた。アンケート結果から災害の伝承と、防災教育の大切さについて確信をもつことができた。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	1冊の本をまとめるということは、種々大変なことはたくさんあったが、前述のようなアンケート結果から、大きな手応えを感じている。今回は、防災教育チャレンジの助成をいただいて、『このたねとぼそ』を発刊することができたが、印刷物は底を尽きる。伝承本が今回限りで終わってしまうのではなく、もっと多くの読者の手に渡ることや、長期間継続することが課題である。	

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	片田敏孝氏（東京大学大学院）
関係者の説明	東日本大震災以前に釜石市の防災教育を指導して下さった方
関係者の連絡先	

★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	全国民、世界中の人に
伝えたい内容	過去の災害を伝承し、未来の命を守る。



## 実践したプランの内容と成果

記入日	西暦 2023 年 1 月 3 日 (2022 年度のチャレンジプラン)
実践団体名	2011team 釜石小ぼうさい
実践番号	2
タイトル	東日本大震災伝承 フィールドワーク・パネルディスカッション ～大津波を生き抜いた先輩たちが語る「いきいき生きる」～
実践担当者のお名前	加藤孔子・篠原優斗・内金崎愛海

実践にかかった金額	1 万円未満
実践の準備にかかった時間	数ヶ月 (3 か月)
実践活動を実施した日時	西暦 2022 年 5 月～西暦 2022 年 7 月
実践の所要時間	3 時間
実践の運営側で動いた人の人数	11 人
防災教育の対象者の属性	小学生 (高学年)・大学生・教職員・市職員・防災関係者
防災教育の対象者の人数	約 30 人
実践を行った都道府県と市区町村	岩手県釜石市
実践を行った具体的な場所	岩手県釜石市只越復興住宅 4 号棟前～天神町 (旧釜小跡地) 青葉ビル
★実践に必要なだった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	大津波を生き抜いた子どもたち (現大人)・小学校教員

達成目標	大津波を生き抜いた子どもたち (現大人) が自分の避難経路を現在の釜石市内の小学生を対象にフィールドワークを行い、学校管理下外で、何を考え、どのように避難したかを伝え、新たに想定される地震津波への防災意識を醸成する。さらに、パネルディスカッションで、「命を守ること」の大切さを実感させ、防災意識の高揚を図る。	
どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに

## 実践内容・方法

## 1 東日本大震災伝承フィールドワーク

当日は、あいにくの雨だったが、「災害は雨でも起こりうるから。」と、参加児童の小学校の校長先生方をはじめ、教職員の皆さんが児童や保護者に理解を得てくださり、実施することができた。

震災当時小学生で、大津波を生き抜いた篠原さんの案内で、震災当時の避難経路をたどる体験からスタートした。



6年生だった篠原さんはあの日、同級生やその弟（2年生）たち十数人と友達の家で遊んでいた。巨大地震後に大津波警報が発令され

ると、すぐに避難することにしたが、避難先を考えた。そこから近い避難場所は2通りあった。一つは、距離は近いが海側に向かう「浜町避難道路」。もう一つは海から離れるが坂道が続く「旧釜石小学校跡地」。みんなで話し合い、海側ではない坂道に向かって走り出した。それは「浜町避難道路」に向かうと、海側に向かうことになるので、波をかぶることになるからだ。

さらに、信号機が止まり混乱する町の様子などを伝え、上り坂に差し掛かったところで、「走ってみよう。」と、あの日



の避難行動を再現した。旧釜石小学校跡地に着くと、「緩い坂道だけど、走るだけでも大変だよ。でもね…」と一呼吸。あの時、自

分達は差し迫ってくる黒い波を背に、低学年の児童を前に走らせたり、遅れそうな子はおんぶをしたりしたことを紹介した。そして、「いざという時にも役立つ地域の人とのつながりを大切にしてほしい」と呼び掛けた。

2 東日本大震災伝承パネルディスカッション

～大津波を生き抜いた先輩たちが語る「いきいき生きる」～



フィールドワーク終了後には、青葉ビルに移動し、パネルディスカッションを行った。

震災当時は3年生だった内金崎さんは、自宅と一緒にいた祖父母が過去の

経験から逃げようとしなかったため、泣きながら必死に祖父母に避難を促した。結果、自分の命を守り、家族の命も救った。

「自分は弱虫で泣き虫だったけれど、説得できたのはきっと釜石小学校での防災教育があったから。今も釜石小学校では避難訓練をしているとのこと。皆さんも真剣に取り組んでください。」と力を込めて話した。

大津波を生き抜いた先輩2人の話を聞いた後、小学生たちはグループワークに取り組んだ。避難の判断ができた理由や必要な力、自分たちにできることを話し合った。「普



段の生活や行動の積み重ねが、いざという時に力になる。」「避難訓練は本気でやる。」など備えの大切さを再認識した。小学生は「家にいる時でも即時に対応し、避難をした先輩はすごい。」「相手を信頼する大切さを知ることができた。」避難の方法は災害の種類や地域によって違いがあるみたい。もっと勉強したい。」と刺激を受けた。

得られた成果

震災を知らない子どもたちが、先輩から震災当時の話を聞くことで震災や災害を自分事として考えることができた。さらに、大津波を生き抜いた先輩たちが夢に向かって今をいきいきと生きている姿に憧れをもつとともに、いのちの大切さを実感した。

どのくらい身につく

知識・技能

大いに

ましたか？	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	<p>このフィールドワーク、パネルディスカッションは、市教育委員会の共催を得て実施したものの、「2011team 釜石小ぼうさい」が主催する学校教育課程外の活動であるので、特に安全面に配慮した。</p> <p>また、夏休み中、コロナ禍での参加者の招集に苦労したが、当該小学校にこの活動の理解を得、多大な協力、支援をいただいた。</p> <p>課題は、今回のフィールドワークが今回限りで終わってしまうのではなく、継続すること。</p>	

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	釜石市教育委員会、釜石市立釜石小学校、釜石市立双葉小学校
関係者の説明	釜石市教育委員会には共催を依頼した。釜石小学校、双葉小学校は児童の参加協力校
関係者の連絡先	

★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	全国民、世界中の人に
伝えたい内容	過去の災害伝承 ～大津波を生き抜いた子どもたちの出番 地域の防災文化の礎に～